

神戸子ども議会の概要

1. 経緯

神戸市次期基本計画の策定にあたって、将来を担う子どもたちからこれからの神戸づくりに対する提案や意見を述べてもらい、併せて、議会の役割や運営について子どもたちに興味・関心を持ってもらう機会とするため、平成21年7月30日、市会本会議場において開催した。

2. 概要

◇日時・場所

平成21年7月30日（木）午前10時開会 市会本会議場

◇主な出席者

市立中学校の代表生徒 166名（2名×83校）
市長、教育委員会関係者、企画調整局関係者
正副議長等

◇発表内容

「2025年のわたしたちのまち神戸」はこのようにあってほしい、というテーマで、生徒会として取り組んでいる活動をもとに、各区の代表9名の子ども議員から提案・発表があった。

（発表内容の概要は別表のとおり）

また、その内容を踏まえて生徒全員より「神戸子ども宣言」が提案され、可決した。

◇ 発表内容

発表者	テーマ	概要
兵庫区 須佐野中 西田さん	地域と共に 震災を風化させない	震災の記憶がほとんどない生徒が多い。震災を伝えていくために何ができるかを自分たちで考え、希望の灯の分灯などを行った。
灘区 鷹匠中 辻本さん	生徒会での話し合いから	だれもが住みやすい、あいさつが飛び交う神戸が理想。神戸総合型地域スポーツクラブを起点に大人と子どもが触れ合えるまちがつけられるのではないかな。
中央区 筒井台中 應矢さん	地域でのボランティア活動について	地域のボランティア活動の経験から、助け合いが大切であることを学んだ。若者が積極的に地域の行事に参加することで地域の絆を深めることができる。
東灘区 魚崎中 島岡さん	ハートプロジェクトの取り組みから	あいさつ運動や小学生とのスターウォッチングなど、地域貢献の活動を続けている。まず中学生から活動を広げ、地域が一体になるまちづくりに取り組みたい。
垂水区 塩屋中 伊藤さん	あいさつ運動 学校での取り組みから	あいさつや決まりを守ることは、簡単にできそうだが社会で最も大切なこと。小さな積み重ねで、人が信頼し合える魅力的な神戸をつくっていこう。
西区 西神中 田中さん	地域交流に環境活動を交えて（私が考える 2025 年の神戸）	地球温暖化を解決するのは私たち人間。みんなが 3R に意識をもち協力する人が増えるよう、中学校からアルミ缶回収などの取り組みを進めていく。
北区 鶴台中 手嶋さん	ボランティア活動 清掃活動を通じて	校門周辺や地域の清掃活動を続けている。効能は地域の一体感、達成感、まちが綺麗になる気持ちよさ。自分の体を動かすことから始めることが大切。
長田区 長田中 田中さん	環境への取り組み	環境学習に取り組んでいる。壁面緑化やソーラーパネル、地域の清掃やボランティアなど。節電やごみ減量など、まだまだ出来ることはたくさんある。
須磨区 高倉台中 越田さん	ボランティア活動 ネパールキャンペーンについて	10 年続いている活動で、募金で小学校建設も。「人を思う心」を育てることができる。地域に広めて、神戸を「人を思う心」でいっぱいのもちにしたい。

神戸子ども宣言

僕たちのまち神戸は、山と海に囲まれた、広大な自然の中で、豊かな文化を育んできた、とても美しいまちです。

この美しいまちで学んでいる僕たち中学生が、本日、市会本会議場に集まり、『「2025年の私たちのまち神戸」はこのようなまちであってほしい』というテーマで、未来の神戸に対する夢や願い、そして、それを実現するための生徒会での取り組みを発表できる機会を得ました。

僕たちは、神戸の歴史や文化を育んだ、先人の努力を受け継ぎ、人々が集い、共に助け合い、人と人、心と心のつながりが大切にされる、愛に満ちあふれたまちにしていきたいと思います。そのためには、未来の神戸を担う僕たちが、共生・友愛の精神を大きく広げ、多くの人々の心が一つにつながることで、理想への第一歩になると思います。僕たちは、それを実現できるよう、精一杯努力することを決意します。

僕たちが神戸市民の一員であるという自覚を持ち、今、未来の神戸のためにできること、やらなくてはいけないことを自ら見つけ、行動できるようになっていきます。そして未来への夢、希望を持ち、かけがいのない毎日を無駄にせず日々前進していくことをここに宣言します。

第15回「学長との懇談会」の開催結果について

1. 日 時 平成21年8月6日(木) 13:30~15:30
2. 場 所 神戸薬科大学 10号館 4階会議室
3. 出席者 (大学等) 市内25校の学長・校長(代理出席1人含む) 20人(欠席2人)
(神戸市) 矢田市長、梶本副市長、鶴崎副市長、石井副市長ほか
4. 意見交換
テーマ: 「新型インフルエンザ及び『行こう! 神戸』キャンペーンについて」
「神戸づくりの指針について」

<新型インフルエンザ及び『行こう! 神戸』キャンペーンについて>

(神戸市立工業高等専門学校)

- 新型インフルエンザの発症・拡散時期にも、一部のスポーツ大会が続行されている例があった。高校以下は教育委員会との連動で休止等の対応をしていると思うが、大学等については各種競技団体や体育協会、クラブ活動など大学組織の中だけで考えられないものだと思うので、行政の対応との連携も含めて今後の対応が課題であると感じた。
- 県と市が必ずしもスムーズに情報交換されていないところが散見された。
神戸市の中でも、全学生の健康状態を教育委員会に報告していたが、他部局から同じデータの提出を求められることがあった。現場としては大変な作業になるので、そのあたりも今後の課題として考えていただきたい。

(神戸芸術工科大学)

- 今回ほど日常の大学間の情報の連携が必要だということが感じられたことはなかった。学園都市を中心とした大学連携のUNITYのメンバー、事務局等と大変いい連携ができたと思っている。情報の速やかな開示や共有を行うためのネットワークが今後も必要であると感じた。また、このことと関連して、今回、休校に伴い時間割の変更や教員の調整などいろいろ調整に苦慮したが、学内のみならず学外の連携大学との調整なども考えると、私たちが頼りとする情報拠点があればいいと思う。

(兵庫医療大学)

- 今回は、霞ヶ関がすべて情報・対応をコントロールしすぎて、現場とのギャップが非常にあった。震災のときの教訓がどう生かされているのかというのは、恐らく皆さん感じられたと思う。ヘッドクォーターが、皆さん慎重にと言いながら、一方であれだけ過剰反応しており、日本では疫学に関する訓練ができていないと感じた。こういう時は、国との関係では、県と市が一体となって、地域としてももう少し意思決定できる体制を普段から構築しておく必要がある。
- 高校や中学とは事情が異なる面もあるので、大学を休校にする場合は今回のことをよく分析し、ある程度ガイドライン・マニュアルをつくって、あとは各自で判断するようにすればよい。基本線のガイドライン・マニュアルをぜひつくっていただきたい。
- マスコミの過剰反応等により風評被害などが出ている。マスコミ・ジャーナリズムの方は、もう少し知識を深め、実態を正確に伝えてほしい。
- マスコミ対応は個々ですると大変なので、こういう感染に関しては行政が一括してやっていただきたい。各施設に感染が出れば中央で全部情報を収集し、そこで公表をするという形にし、マスコミは現場には行かないという協定を結んでほしい。そのためには情報をいかに共有するかが大事になってくると思うので、情報の共有と、大学としてはどういう対応をしたらいいかという基準をつくっていただきたいと思う。

（神戸親和女子大学）

- 学校内で何か起こった場合は休校などの対応がとれるが、入試などで高校生が来る場合について、どのように対応すればよいかアドバイスをいただきたい。センター入試は文科省がいろいろ指示するだろうが、個々の学校の入試については、たとえば入試の機会をもう少し増やすなどの対応が必要になると思う。

（甲南大学）

- 今回は弱毒性であるということがわかっているから落ち着いているように見えるが、弱毒性であれ、やはりこれから大量に蔓延する可能性を秘めているものではないか。
- 電車では乗客全員がマスクし、たまたまマスクを忘れた私が周りからじっと嫌な目で見つめられるなど嫌な経験をした。逆に今度は、私が東京に行ったら、まるで菌を背負ってきたような感じで接せられた。霞ヶ関の行政のトップやマスコミの過剰な反応については何とかしてもらえないかと痛切に感じた。
- 中央と地方自治体の関係性で言えば、今後、こういう危険性を伴うものに関しては、自治体の主体性で判断を大いにしていきたい。
- インフルエンザに限らず、学生の大麻や犯罪など、マスコミ対策が必要な場面が多く、健全な研究教育の場を守るうえで課題になる。この学長懇談会のように、大学間で情報交換を密接に行う必要がある。

【市長コメント】

- 本市では以前から鳥インフルエンザのH5N1に対応するための本部体制をとっていた中で、今回、海外渡航歴のない高校生が発症した。これは、医師会等の先生方の意識が非常に高く、詳細検査にまで至ったことで初めて発見出来たのだと思っている。日本の至るところでウイルスは蔓延していた中で、きちんと詳細検査を実施した結果、今回のような形で神戸が初だと言われたのではないかと感じている。
- 先日の新型インフルエンザへの対応について言えば、霞ヶ関はいわばH5N1タイプの警戒態勢を崩さなかった。私どもも集団感染の防止という観点から、最初はH5N1的な対応でやらざるを得なかったが、しばらくして季節性インフルエンザに近いということが分かった。第1学区をはじめ、第2・第3学区の休校措置をとったが、詳細検査の結果、感染者ゼロの状態が2日間あったため、学校はじめ各施設を再開したい旨を厚労省に伝えたところ、神戸は神戸独自のスタイルでやってくださいと言われた。
中央市民病院はすでにパンク状態だったので、一般医療機関に診療をお任せするしかないという判断をし、医師会にも協力いただく状態になっていた。また、神戸の検疫所長も、これは通常の季節性インフルエンザに近いものだから大層な対応は必要ないと主張してくれた。霞ヶ関はそういうことは一切想定しておらず、神戸の対応は非常に先見例として大臣は評価され、神戸市長が決められるんだったら、それですべてやっていただいたら結構ですと言っていたいき、休学及び休校もすべて取りやめとなった。今回、神戸市の医師会及び行政の検疫機関は非常に正しい判断をしたと思っている。
- 現在、「新型インフルエンザ対策神戸モデル ― 早期探知地域連携システム ―」を考えている。早期探知というのは、医師会、歯科医師会、施設、薬剤師会、学校、保育所などをベースにしてあらゆるところに網を張っておいて、もし事例が発見されればすぐに保健所に集約しようというものである。そして、地域での患者発生状況の探知等については、保健師による仲立ちを考えており、第2派に備えてネットワークを張り、異常が発見されればすぐに保健所に意見を集約し、医師会をはじめ各関係機関が一体になって対応しようという危機管理体制をとろうとしている。今、こういうネットワークは他都市にはないが、神戸市は神戸独自のスタイルとして早期探知システムを組み上げて、初動を早くすることが非常に大事であると感じている。
- 国に対して今後、風評被害などを起こさないよう、外国での奨励などの情報開示をきちんとやっていただきたいと思っている。
- 自治体は自治体に任せて独自で判断するというふうにさせていただければ、我々のような大都市はいわばフル装備の機能を持っているので、十分対応できると思っている。今後、第2波は間違いな

く来るし、これに対する警戒を緩めることはあってはならない。そういう事態が集団的に起こらないようにしていくためのシステムを組むので、その中に先生方もお入りいただいてやっていくことができればいいのではないかと考えている。

<次期総合基本計画「神戸づくりの指針」について>

(神戸学院大学)

- 基本的考え方の中で、知の集積、人材育成、地域づくりや、人・物・情報の交流・融合、ポートアイランドの活性化といったようなことも挙げられており、大学がこれからも神戸市にいろいろな面で協力していけるのではないかとこのように考えている。
- 本学を初め、多くの大学がポートアイランドにいろいろキャンパスをつくっている。学生の数が増え、学生の生活環境の充実・改善が非常に大事であると感じる。一つ具体的に言うと、学生をいかに三宮からポートアイランドに輸送するか、あるいは、神戸の大学に来る学生の中には地方から来て下宿する学生もいるので、生活環境の一つとしてワンルームマンションなども積極的に整備していただきたいと思っている。何年もすれば、すばらしい学びのまちになっていくのではないかと考えている。私の経験から言うと、本学が西区の有瀬に出来た時には畑の中にぽつんと建っていたが、今は整備が進み非常にしっかりとしたまちになってきている。ポートアイランドも時間がかかるかもしれないが、スピードを上げて学生のまちづくりを考えていただきたい。

(神戸大学)

- 本学もポートアイランドに先端融合研究の拠点を置くと8月4日に記者発表したが、大学の魅力をいかに高めるかということと、神戸大学をどういうふうな大学にしていくべきかといったような枠組みの中で考えた構想である。神戸大学は様々な学術分野の中に活躍されておられる方がおり、それをまとめて一つのベクトルに乗せて、こういう教育・研究分野を発展させていくんだということを明確に打ち出し、ポートアイランドに拠点を置くことにした。今の六甲台のキャンパスはあまりスペースもないし、今のキャンパス内ではどうしても今までの延長線上の建物になってしまう。このエリアの特徴を活かし、我々の目指す拠点一産官学の連携拠点、先端融合の研究をする拠点として、国際的な連携拠点をつくらうと長年検討してきて、やっと我々の構想を打ち出せる時期になったわけで、うまく研究成果を出して多くの方が集まり、ポートアイランドが活性化されるといったようなことができればと考えている。

(神戸芸術工科大学)

- 私たち大学は、社会に出る人材をいかに育成するかが大きな課題であるが、近年の就学・就職状況を見ると、ただ大学を卒業させれば社会に役に立つ人材が育つという訳ではなくなったと思っている。大学卒業後も、いかに大学が卒業者を支援できるか、卒業後の新しい学習のチャンスをいかに提供できるかということが大きな課題だと思う。そのためには、やはり神戸でしか学ぶことができないとか、神戸でしか技術をつけることができないとか、世界のトップクラスのテーマを各大学で一つ、二つ生み出して、それを大いにアピールしていく必要がある。大学から神戸という地域社会に出て、私たちがどのような受け皿を地域社会と一緒に作り、そこに卒業生へのチャンスを与えていくかが課題だろうと思う。
- 今、「アニメ」というのは、日本が世界のリーダーシップをとっている。本学では神戸市の支援も受け、アニメの原画マンを養成するために全国に声をかけ、大学を卒業された方、プロとして働いていらっしゃる方をもう一度集め、その能力をさらにスキルアップさせる仕掛けを準備している。こうした取り組みが、新長田など神戸の中でまちづくりを展開されているところにうまく定着し、そこで日本だけではなくアジアからのアニメの制作者を養成できないか。これはデザインの大学としての拠点だが、世界にこれしかないとか、これが私たち神戸ではトップだというもの一つ、二つと積み上げていく発信が必要ではないかと考えている。大学として、こうした拠点をつくることで活力、魅力を世界に発信することは大きな課題であると思う。

（神戸親和女子大学）

- 「神戸を支える『人財』」ということで、昨年1月に、神戸市の補助をもらって子育ての支援のセンターをつくったが、この8月に親子の参加者が1万人を突破し、学生のボランティアも1,000人を超えた。学外の社会のオフキャンパス教育と、学内のオンキャンパス教育とを融合させて学生を成長させたいと思っている。地域社会の中で学生が頑張りながら、神戸を支える人財になってくれればと思う。
- 学生がまちの中で、楽しく様々な分野で活動しながら自分を成長させ、最終的には自分の希望する職についてくれたらいいと考えているが、今は大学として非常にいい方向に向かって学生が成長しているのではないかと感じている。いろいろな形で神戸市に支えてもらいながら、神戸市の中の大学として、もっといろんな形で連携をとりたいと思っている。

（神戸市看護大学）

- 本学は規模が小さい大学で、その中で例えば短期留学の時に、一つの大学だけでは人数が少なかったり、旅費の問題等がある。各大学によって専門が違うので難しい部分もあると思うが、神戸市には多くの大学があるので、少し広い視野を持って幾つかの大学がジョイント的な形で短期留学などができないかと思っている。

（神戸市立工業高等専門学校）

- 今日大まかな方針をお聞かせいただいて、ほぼ網羅できていると感じているが、近畿圏の広域地方形成計画の中で私が提案申し上げていたのが、ベイエリアに環境・エネルギー産業が集積し、低炭素社会を先導するとともに自然環境も豊かな地域をつくる「グリーンベイ構想」である。これは、新しく今のパネルベイというものを基本にしながら、近畿圏がグリーン化に向かって、次の産業の推進力にしていこうというものである。そうすると、都市のインフラやアメニティ施設も、やはりグリーン化に向けた戦略が都市の基本計画の中で必要になってくると思う。これは「地球環境問題」という文言の中で全部含まれていると思うが、個別にはグリーン化を進めるための戦略と戦術が具体化されなければいけないだろうと感じる。
- 神戸市は傾斜土地であり、5キロも海岸から離れると山の上で車がないと生活ができない。どんどんお年寄りの方が山の上のマンションを売り払って駅の近くに移り、山の方は空洞化が進んでいる。山の方でも生活できるように、しかもグリーン戦略ということを考えていこうとすると、神戸市が思い切って、運転免許の要らないゴルフ場のゴーカートのようなもので、山の上も走れるようなものを、定期的に周回させることを一つの戦略として考えていこうということを大きく打ち出しておく必要があるのではないか。
- 「地域」という言葉が、神戸市の区単位での地域になっている。近畿圏全体での「神戸地域」という意味で「シティー・リージョン」から、さらにもう少し広げて「グローバル・シティー・リージョン」として、神戸が他の都市と何を連携するのも考えていく必要がある。例えば次世代スーパーコンピュータと西播磨のSpring-8との連携の仕方はどうするのか。連携を具体化するための組織等がないとなかなか動かないので、ソフトマネジメント、あるいは、それを運用する組織が必要になってくると感じている。
- ポートアイランドに大学が進出してきてきれいになったが、例えば業務ビルやマンション、大学等しかなく、とても寂しい。例えば飲み屋など、人が生活するまち・地域の中で学問するというのがよく、隔離された場所ではなかなか学問は進まないし、エネルギーも出てこないのではないかとこの感覚を持っている。新しいまちづくりのコンセプトとして、もう少し生活できる機能を導入する方策を考えていく必要があるのではないか。交通も不便であるので現在は本土から離れた島のようになっているが、三宮と連続できるような町並みが必要で、特に大学周辺の町並みづくりをもう少し別の視点でお考えいただきたいと思う。
- 若者の地元就職ということ考えた場合、神戸市には中小企業が圧倒的に多い。それらの中にはオンリーワン企業が非常に多く、それらが今どんどん成長しているし、海外へも進出している。その方々に聞くと産学連携といっても、工場です仕事をしながら「これはどうしたらいいんだろうか」といった時に即座に回答が返ってくるシステムが本当の産学連携であり、研究発表や懇親会もいいが、

もう少しタイムリーに相談できるシステムをつくってほしいと言われた。産学連携の一環として、こうした質問にインターネットで即座に回答できるシステムをつくっていったらどうか。もっとITを活用して産学連携を進めれば、産業を活性化する方法が出てくると思うし、知的財産も活用できる。そういう仕組みも少し考えていただきたい。

【市長コメント】

- これからの時代、「人財の育成」ということはかなり重要な視点であると思っており、その環境をどう整えていくかということも大変重要なテーマであると思っている。例えば、ポートアイランドについても、2期の発展に伴って1期の整備を考えていく必要があるのではないかと感じている。元のまちに戻すのではなく、新たなまちづくりを展開できるようなデザインを考えてみてはどうかという検討を始めようとしている。
先ほど、生活機能的なものが要するというお話もいただいたが、今後さらに大学が集結していただいた場合を考えて、まちをどのように考えていけばよいか考える必要がある。また、学生の皆さんがこの地域に居住していただく際に、適正な場が要るのではないかと思う。例えば、学園都市から少し離れているが、垂水警察の近くに学生マンションをつくったら学園都市の学生がすぐに入っていたという事例もあるので、大学連携の中でこうした需要の点検をしながら、施設をつくっていくということも一つの方法ではないか。
- 大学間のジョイントのお話があったが、やはりこれは重要なお指摘ではないかと思っている。経費の要ることではあるが、連携していただく中でそういうことが可能になるような方策を今後内容を詰めて実行してみてはどうかと感じた。
- ポートアイランド地域については、進出をお決めいただいた兵庫県立大学や神戸大学等の大学進出が契機となって、全国の大学が研究に来ていただけるようになった際には、それを受ける素地について考えていく必要があると考えている。これについては、近隣の企業等からも要望をいただいているし、女性の研究者の方々のための子育て支援など、いろいろな課題がある。人材が集まっていたりするような素地について、長期的な視野のもとで計画の中に位置づけていくということが重要ではないかと思っている。
- デザイン都市の推進に関連して、旧生糸検査所を神戸市が取得した。使い方によって価値が相当高まるのではないかと感じている。この旧生糸検査所の機能を少し多機能に考え、ベンチャー活動の場や、アニメ・映像の拠点をつくってみるということも一つの方策ではないかと感じているので、これからの整備の中でまたご検討をいただければと思っている。
- たくさんご意見をいただく中で、これからの戦略としてやっていかなければいけないもの、すぐに取りかからなければいけないものなど、さまざまお話をいただいたので、区分けしながら進めさせていただきたい。

※次回は神戸女子大学にて開催予定。

第19回 政策提言会議について

1. 開催日時 平成21年8月23日（日） 10:00～12:00
2. 場 所 神戸市役所14階 大会議室
3. テーマ 「神戸市次期基本計画」について
4. 進行役 社会福祉法人プロップステーション 竹中 ナミ 理事長
5. 出席者 政策提言会議メンバー 35名（男性18名 女性17名）
6. メンバーの主な発言（要旨）

【総論】

- 「神戸づくりの指針」検討のための5つの「基本的な考え方」について、まずしくみづくりを重視すべき。市民が市長に直接意見できるこの政策提言会議も大切なしくみの一つ。
- 一人ひとりの能力を活かすということは、下手にすると孤立につながりかねないが、それを自覚した上でどのように地域のつながりを広げていくか、また、地域としてどのように支えていくかが神戸のこれからの指針となる。

1. 市民一人ひとりが能力を発揮し支えあうまちづくり

- 市教育委員会とPTA協議会で人材養成事業を行っているが、学校と地域とのつなぎ人の育成を目指し、周りとの折り合いの付け方を学ぶことが必要。
- 若者が神戸で仕事をしたいと思って帰ってきても、仕事が無く商談相手は東京が中心となってしまうため、若者が神戸でスキルアップできるしくみが必要。
- 高校中退などで多くの子どもが行き場をなくしている。就職させて、活用しきれていない能力をまちの中で生かせるようなしくみを作れないか。
- 医療産業やスパコンの次の新産業育成に向けて、優秀な人材を呼び込むためには、モラルの高いまちとして、外国人学校やソーシャルクラブが充実していることが大切である。
- 教育の無料化は出来ないか。そこで高齢者等が教えるようにすれば、新たな雇用にもつながっていく。

2. 人と人とのつながりを活かした地域主体のまちづくり

- 挨拶をしても返さない人が見受けられる。市民一人ひとりの意識改革が必要。
- 高齢者等の災害弱者の支援のため、専門職のみでなく一般の人も日頃から協力体制を作るべき。
- スポーツ大会などを通じて、こどもから高齢者まで一緒になって楽しく行動できる機会が必要。
- 地域の行事にあまり参加していない団塊の世代を招き入れることにより、高齢者から若者へのつながりが出来る。
- エコタウン事業と環境省のこどもエコクラブを抱き合わせで行うことにより、子どもが親以外の大人とつながりを持つことができる。
- 商店街は地域生活の要であり、情報発信の場となるので、再建が必要。
- 規範意識のない大人が増え、今の少年・少女は信用できる人がいないと感じているため、高齢者が活躍できる場をつくり、少年・少女が高齢者に感謝の気持ちを感じられるまちづくりが必要。

- 区民センターは人口に応じて設置されているようだが、東灘では空きがないのに、垂水や須磨では空きがあると聞く。改善が必要では。

3. 新たな価値を創造し世界へ発信するまちづくり

- 神戸の財政状況改善度ランキングが第一位であることをもっとPRしていくべき。
- 神戸の良い部分をアピールするペーパーを基本計画と併せて作成すべき。
- 大阪の「水都」、京都の「古都」のような、みなとまち神戸のまち全体を表すような言葉が必要。
- スウィング・オブ・ライツのような取組みは恒久的なものにすべき。
- 飛騨高山では、外国人観光客に5か国語のパンフレットを配り、一般のチケット売り場でも英語で対応していた。神戸も外国人観光客に優しいまちになるべき。
- 神戸は日本のサンフランシスコであると思っている。川崎重工の路面電車スイモを南北に走らせてはどうか。
- マラソン、サイクリング、カヌーなどの人力の移動手段をデザインや健康、観光につなげる「エコデザインスポーツタウン」を提案する。
- 日本のジャズ発祥の地として神戸にジャズ博物館を作り、大いにPRすべき。
- 文化ホールにオペラ劇場を。また、トイレを増設してほしい。
- パリ市で利用されているレンタサイクルを神戸市にも導入すべき。
- 長崎や函館に比べ、神戸の夜景は発信しきれていない。夜景を見たら神戸で1泊というような神戸で滞在する戦略を検討していくべき。

4. これからの神戸を支えるしくみづくり

- 税収増に直結する市民や企業の増加に向け、付加価値を高めるべき。
- 家庭を持ち家族がいる人は、地域に溶け込みやすい環境にあるが、引きこもりがちなIT系企業の人や独身の人は、地域に入りにくい環境にあるため、しくみの構築が必要。

5. 活力ある安全で快適なまちづくり

- ポートアイランドに小さな公園ではなく森のような公園を作ってはどうか。
- トアロードに馬車を走らせてはどうか。人力・馬力等による輸送手段は、都市の魅力に温かみをもたらす。
- おしゃれな神戸らしく乗馬警察を導入してはどうか。
- 震災復興記念公園のバイパス下の空間に、ローラースケートなどのニュースポーツを楽しめる場を作ろうとしている。手を抜かずにしっかりとオープンしてもらいたい。
- 神戸空港は午後10～11時台の東京発の便が必要。
- 関空からのバス降場は車道である上に、駅までが坂になっており、親切でない。場所を変更するなり、バリアフリー化するなり工夫が必要。